

<4月22日(金)-23日(土)第2戦レポート>

2016 D1 GRAND PRIX SERIES Rd.2 FUJI DRIFT

コースコンディション：ドライ

PACIFIC RACING TEAM with DUNLOP 野村謙選手(車両：NAC DUNLOP BRIDE ER34)

最終成績：単走15位/総合15位

<本文>

2016年第2戦は2年ぶりの開催となる富士スピードウェイ。2年前の審査コーナーはAコーナーだったが、今回はヘアピンを逆走で使うレイアウトだ。このコースレイアウトでの開催は2011年以来5年ぶりとなる。ふだんはまったく走行できないコース設定のため、このコースを走ったことのない選手も増えたが、野村選手は2010年のエキシビジョンマッチで優勝するなど、ここは比較的得意としていた。

審査コーナーは、300R手前からドリフトを開始し、振り返ってヘアピンに飛び込み、ドリフトで立ち上がっていくところまで。進入速度は200km/h前後となることが予想される高速コースだ。そのためパワーも重要になる。いっぽうでコース幅が広く、ドリフトをしようと思った場合にはラインの自由度も高いコースレイアウトになるため、このコースでの大会の経験がある選手のほうが走りのイメージをつかみやすく、やや有利であることは予想された。

この大会に向けて野村選手はスカイラインの足まわりのアーム類を変更、キャンバー角を変えたり、ウイングをつけるなどしてテストを行い、戦闘力を上げてきた。

練習走行1本目はおもにエンジンの燃料セッティングに費やされた。そして2回目の練習走行の途中でセッティングがほぼ完成。クルマの調子は上がっていた。



単走予選本番、このところ予選敗退がつづいている野村選手だが、富士の走らせかたのイメージはできていた。1本目は少し流されてしまう失敗があったため、2本目は振り返りを少し抑えめにするようにして成功。96.81点ととり、久しぶりの単走予選通過を果たした。

翌日の単走決勝、1本目は300Rをいいスピードで駆け抜けてきたものの、ヘアピンで飛び出しそうになってしまい、アクセルを踏めない時間があった。94.80点。しかし2本目はいいリズムで走りをもとめ、95.78点をマーク。前日の単走予選よりも下がったものの、15位に入り、2012年以来3年半ぶりの追走トーナメント進出を決めた。



追走トーナメント・ベスト16の対戦相手は1000ps以上のパワーを誇るGT-Rを駆る昨年のチャンピオン川畑選手。しかし、野村選手はストレートでも川畑選手に離されず、近い距離を保って300Rをまわってくると、そのまま川畑選手のすぐ後ろにつけてリズムよく振り返し、ヘアピンに進入した。この時点ではアドバンテージをとったかと思われたが、コースぎりぎりまで曲がっていった川畑選手に対し、野村選手は曲がりきれずコースアウト。逆にアドバンテージをとられてしまう。2本目は川畑選手が無理せずにノーミスで走り、野村選手の敗退が決まった。



<野村謙選手コメント>

もともと富士の300Rは不得意ではなかったんやけど、もう楽しい1日だった。クルマもようやくできあがってきた感じで、川畑にもついていけた。ただ、審査席前でハンドルが引っかかった現象がずっとあって、これまでも自分でナックル作ったりはしてるんやけど、なかなかうまくいかなくて。今回もロックした状態になっちゃったかな。帰って、ナックルつくらないと。まあでも、そこが解消できれば、だいぶいいクルマになってきたと思う。ストレートもそんなに負けてなかったと思うし。あとは足さえできればチャンピオン獲れるな！(笑)。